

# 自閉症児における常同行動の意味について

川 瀬 泰 治

(一)

自閉症児は、幼児期の初期からさまざまな特異な行動特徴を示す。

今日では自閉症のおもな症状は、自閉的孤立、言語の異常、同一性の保持や固執といった強迫的要求の3つに集約される。これらはカナー(1)が最初に症例報告をした際に記述した特徴と基本的には変っていない。発達の過程でそれらの行動特徴のいくつかは変化したり多少の改善がみられるようだが、その本質的な特徴は成長後も一貫して維持されるようである。従来これらの特異な症状についての解釈をめぐって、さまざまな論争がなされてきたが、近年では言語・認知障害説とか感覚障害説・知覚障害説という考え方が支配的となつてゐる。

これらの解釈に連なる研究は、さまざまな実験やテストを用いて自閉症児の認知や知覚、言語の異常を明らかにしてきた。そしてたとえば、自閉症児のことばには遅れやおうむ返し、人称代名詞の混乱といった特有の言語症状がみられることから、言語中枢の機能の異常を想定したり、また自閉症児には知的な遅れやかたよりがみられることから認知機能の障害を想定し、また感覚刺激へのこだわりなどから感覚や知覚の機能の障害を想定する。しかし以前(2)にも指摘したように、言語や認知に障害があると言つても、その言語や認知とはいつたい何

か、またその言語や認知機能のどのような変容過程が自閉的症狀をもたらすのかが解明されない限りは何も言つたことにはならないのではないか。従つて、自閉症を理解するためには、まず人間の認知や言語とはいつたい何か、またそれらが発達の過程でどのように発生して行くかが問題になる訳だが、これは哲学や心理学の永遠のテーマといえるものであり、古来絶間なく問いつづけられてきた問題である。

ところが村瀬(3)もいうように、言語・認知障害説では、人間の認知や言語は自明のものと考えられているふしがある。「彼らにとっては認知や知覚は、いつもわかりきつたものとして前提されている。それは常に△正常に作動するもの▽として前提されている。彼らが問題にするのはその△正常▽さからはずれる状態であつて、それだけが問題なのである(128頁)」。そして認知や知覚、言語はそれ自体は何ら問題にすることはないのであり、自閉症児たちの言語や認知の異常は「特別なもの」とみなされることになる。このような考え方に立つている限りは、自閉症の言語や認知や感覚についての知見をいくら多く集積しても、それらはあくまでも正常から逸脱した特殊なものであり理解不可能ということにならざるをえない。

しかし、人間の現象を解明しようとする探求は、すべての人間の現象を視野に入れて、それらを包括する始点を追求するものでなくてはならないだろうし、当然自閉性の現象をも了解可能にするものでなく

てはならないであろう。また自閉症研究は、こういった人間探求の全体的な構想のなかに位置づけられるような方向でなされるべきである。そして自閉の現象が人間の心的現象の変容過程の幅の中に入ってくるし、自閉性の症状が了解しうるものとなるであろうし、小澤(4)のいう「自閉症の精神病理学」を実現することになるであろう。

以上の視点に基づいて、本稿では自閉の症状をあらためて見つめ直し、症状の心的意味、すなわち個々の自閉の症状が症児にとってどういう意味を持つているのか、またその症状がかれらの世界をどのように反映しているのかを探索しようとするものである。その際に、自閉症の症状というものを、それ自体で客観的なものとしてみるのではなく、その症状を自閉的と感じる我々の存在があつてはじめて生じる相対的なものと考えなければならぬ。そして、自閉の症状を前にした時に感じる我々自身の自閉感・隔絶感の根拠を深く掘り下げ、またそれが生じて来る発生のプロセスを究明することにこそ、自閉症の世界を了解する鍵があると考えられる。本稿ではまず自閉症の症状のひとつである「常同行動」をとりあげてみることにする。

## (一)

常同行動とは、手のひらをヒラヒラ振ってそれをながめる、立ち上がってクルクル回る、紐をくねらせて振る、砂をすくってはサラサラと落とすなどの行動をいつまでも繰り返しかえし続ける行動のことである。これは自閉症の3つの症状のうち、同一性の保持、固執行動に含まれるものであり、多くの自閉症児でみられる。しかし、これらの行動は自閉症児だけでなく精神遅滞でも普通に見られるものであり、自閉症の症状としては従来あまり重用視されてこなかった。その中で石井(5)は、自閉症児と精神遅滞児の常同行動の違いに注目して、自閉症児の常同行動のメカニズムを明確にしようとしている。石井によれば、

自閉症児の常同行動では強迫性が顕著である。やめさせようとすると激しい抵抗に合うし、かといって放っておくと一切の対人的関りができなくなる。そして、没頭して一定の行動を繰り返しかえしている割には本人はかならずしも満足しているのではなく、むしろ徐々に情動が高まってきて收拾のつかなくなる人が多いとしている。また他人が常同行動に加わる(たとえば同じ行動をしてみせる)ことを拒絶するという特徴がある。これに比して精神遅滞児の場合は、概して穏やかな常同行動であり、他者が代行することも可能である。

石井は「自閉症の常同行動は、自閉症児が自己の情動状態を内的にコントロールすることができないために、それを自己刺激行為によって代替しようとしている(153頁)」との仮説を提出している。しかし、石井自身が「常同行動を起こしている最中に異常に興奮したり、奇声を激しく伴ったり、ときには衝動的と思われる行動に移行したりする(155頁)」とか「自閉症児は、常同行動のレパトリーは多様に有していても、それによつて安定することはないように思われる」と述べているように、この仮説は実際の状態像と合致していないようである。このような混乱は、常同行動の意味がつかみにくいことの現れだと考えることもできるだろう。

浜田(6)は、自我形成論の一貫として自閉症の問題をとりあげた。自閉症は自我形成の初期における「自己—他者—事物」の三項関係の成立が不全となり、したがって、三項関係に基づいて形成されてくる他者と共有する意味世界がおおきく損なわれるという。その中で自閉症児は普通の子どもとは違った経路で自分なりの意味の世界を作り上げていくとしている。そして意味世界の広がりに応じて、多動から常同行動・特定のものへの固執、そして同一性の保持へと症状の交替が対応するのではないかという。その中で、常同行動は他者と共有することは出来ないが、本人にとつて一定の意味のある「もの」のもつ物理的ないし感覚的意味を見いだそうとする行動ではないかという。

浜田は、我々が自明なものとしてそのなかに身を落ち着けている意味世界は、前の世代から三項関係を通じて敷き写したものであり、その意味世界を白紙に還元することで、まさにその三項関係の問題を抱えて生きている自閉症の子どもたちの世界を了解の範囲のなかに取り込めるとして、その具体的な研究法を提案する。このような研究法は上述の「真の自閉症の精神病理学」の主張にそうものであり、本研究が出発点として依拠するものである。浜田の自閉症論においては確かに、今まで断片的に見られていた自閉症の症状が相互に関連づけられてひとつのまとまりのなかに見えて来るし、また、困難を乗り越えて、世界の意味を求め続ける自閉症児の姿が浮かび上がってくる。本稿では、浜田の分析をさらに進めるかたちで自閉症児の常同行動の意味を問い、さらに深く自閉性の本質に関するものとして常同行動の意味をとりえようとする。

### (三)

一般に我々が上記の常同行動を前にした時に感じるのは、「同じことを」「何時間も」「繰り返す」「続ける」といった印象であろう。これは、例えば「私はあんな意味のないことを、あんなに長く続けることはできない」といった我々の素朴な認識に抵触するものであり、それがゆえに我々の注意を引いたり苛立たしい感情を引き起こしたりすると思われる。これらの印象や判断は我々の時間意識と深く関連するものである。そして無意味なことをこれだけ長く続けられる自閉症児の時間意識とそれを含む世界が我々にとっては理解の困難なものと感じられる。

ところで、自閉症児の常同行動に接して、上記のような印象を感じるのはいわゆる素朴な自然的態度による判断である。しかし、当の自閉症児は自身のその行動をそのようには感じていないのかもしれない。

おそらく我々とは違った時間意識を持ち、そのもとの我々とは違った常同行動の感じ方やその意味を持っているのかもしれない。そうすると、その行動に接した際に、我々に「同じことを」「何時間も」「続ける」という判断をもたらす我々の時間的認識を白紙に戻して、その認識が成立してくる過程を分析することが必要となってくる。その分析によって、我々の自明な時間認識とは違った時間認識が解明され、自閉症児の時間認識の解明につながる可能性がひらけてくる筈である。

中田(7)は重症身心障害児の常同行動における時間意識の分析を行ったが、その際、根源的時間にまでさかのぼって時間成立の根拠を解明しようとした。根源的時間とは、ハイデガー(8)によって通俗的時間と区別された時間の様態である。ハイデガーは、我々の通常の生活で体験される空間化された認識の対象となる時間を通俗的時間と呼んだ。

その通俗的時間意識を根源で支えているものが根源的時間である。通俗的時間は、我々の相互主観的な世界においては自明なものであるが、自閉症児にとっては自明なものではないであろう。なぜなら、常同行動に対して我々が上述の印象を持つのは通俗的な時間意識に基づいているが、自閉症児はそれに対して相互主観的ではないからである。従って、自閉症児の常同行動の時間的意味を探索しようとする時に、通俗的時間のみに基づいて分析することは無意味であり、根源的時間を問題にしなければならない。

木村(9)は精神分裂病の現象学的研究から、分裂病が自己の自己性の病理であり、また同時に時間性の病理であるとす。そして「人間は時間的存在であり(10頁)」、また「時間とは自己の別名である(10頁)」としているが、ここでの時間はハイデガーの根源的時間と同じものである。浜田のいうように、もし自閉症が自我形成の問題だとするならば、自閉症研究の中心課題は自閉症児の時間意識にかかわるべきであろう。その点からも、自閉症児の常同行動における時間意識の問題は意義があるであろう。

ところで、根源的時間とはなにか。木村(10)は同じ概念を「原時間」と呼んで次のように述べている。すなわち、「いっさいの外的時間経過とは無関係に、自己存在の本質構造そのものから不断に生み出されている時間であり、日常的理解における△経過する時間▽のイメージとはおよそかけはなれたものであるために△時間▽の名称が用いにくいにもかかわらず、人間存在にとつてそもそも時間といわれるような現象を可能にする根源的な根拠である(10頁)」としている。ここでいう自己存在の本質構造というのは、自己が自己自身との差異であり、「自己とは、それ自身と同一ならざるものとしてのみ、自己でありうる(10頁)」ということである。ここで自己と自己の差異が問題となつてはいるが、これらの自己は並列的な二つの自己ではなく、「不平等で非対称」なものであり、一方はノエシスの自己、もう一方はノエマ的自己と呼ばれる。

ノエシスの自己というのは、例えば本を読んだり音楽を聞いたりして、そのことに没頭している時の私であり、ふと我に返つて今さっきまで自分が何をしていたかに気付く時に、表象されるのがノエマ的自己である。ノエマ的自己は「誰がそれをしてたのか」が明確であるから人称的であり、「それをしてたのは私である」という意味で主語的である。これに対して、ノエシスの自己は非定立的であり、今何かに没頭している現在においては自己は主題化されることがない。つまり、現在においては「誰が」ということは不明確であり匿名的であり前人称的であり、機能だけが遂行されているので述語的である。従つて、ノエシスの自己とは本来それだけではまだ△自己▽とはいえないものである。それは「いわば純粹な自然の源泉的自発性のようなもの」だといふ。このふたつの自己の差異は、ハイデッガーが存在論的差異と呼んだものと同じものであろう。

この「純粹な自発性」といわれるものが「自己」のかたちをとつてわれわれに経験されるようになるためには、客体化されたノエマ的自

己から触発を受けて「自己限定」を受けなければならぬという。サルトル(12)が「存在と無」の冒頭であげている例に即していえば、今私がこのシガレット・ケースの中のシガレットの数を数えて12本あると知るときに、私がシガレットを数えていることを意識することはない。しかし誰かに今何をしてたのだと問われれば即座に「シガレットの数をかぞえていたのだ」と答えられる。それは、数えている現在において自己は自己以前の源泉的自発性として機能しているが、それは絶えず非定立的にはあるが「数えている自分」というノエマ的自己に転化していることを意味する。そして、数えていることを「自分のこと」として限定することで新たな差異としての現在における「私が数えること」を生み出すことになる。したがって、ノエシスの自己とノエマ的自己は、二つの互いに異なつた自己でありながら同時に同じ私である。自己というものは「差異であると同時に同一でもあるような、それ自身の内部に矛盾と緊張をはらんだ事態」なのである。そして「ノエシスの自己とノエマ的自己のあいだの差異の自己限定が根源的な時間を生み出す原構造である」という。

ノエシスの自己とノエマ的自己の存在論的差異は動きとして感じられるものである。なぜなら、「動きや変化のないところでは、時間に出会うこともできない(11、43頁)」し、「われわれが生きているということは、絶えず動きや変化を感じとつていくということである。そして、そこから始めて時間の実感がうまれる(11、43頁)」からである。中田はこれと同じ事態を「機能する自我は原初的に流れる」ということを指し示している(26頁)」と表現する。反省作用によって機能する自我(ノエシスの自己)は、対象化され主題化されたもの(ノエマ的自己)へと転化する。この転化は「流れる」という性質を伴ない、反省作用を可能にするものでもある。この機能する自我と主題化された自我は分裂したにもかかわらず同一の自我である。流れ行きつつも常に同じ自我であるということを実現するに「流れつつ常住している」というが、

これは木村が「自己の自己限定」というのと同じ事態であろう。これが時間ということの発生して来るもつとも原初的な事態だということになる。通俗的時間が「川の流れ」のようなものだとか、「過ぎ去る」ものとして思い浮かべられるのは、根源的時間におけるこれらの性質によるものである。

中田によれば、このような流れつつある自我はそれだけで時間意識を生み出すのではなくて、「再想起」の働きが不可欠のこととなる。また、流れつつある自我を生き生きとした現在における自我と同一化するためには、すでに生成してしまつた自我が再想起され、現在の中で反復されなければならない。そして「ここにおいてははじめとわれわれは、非主題的に匿名的に自我が流れるということを経験することに對し、主題的に即自存在としての流れる現在を、すなわち、流れとしての時間それ自体を直感するのである(271頁)」としている。

中田によれば、自閉的傾向の強い重症児の場合には、流れる自我ではあるが、再想起がないために、流れとしての時間を直感することはできない。しかし、自我の機能自体は流れるということが生じている時間性の自我であり、彼らの活動はそれによって規定されたものとなる。そして、彼らの自我は「原初的転化において絶えず新たな今を現実化する自我として存在していることを指し示している(270頁)」という。

自閉的傾向の強い重症児は、「絶えず究極的に機能する自我に触発された自我の機能それ自体を享受している(271頁)」だけであり、「身体上の直接的な身体的感覚によって触発された自我の機能を享受しているだけだ(271頁)」としている。また「現前化という自我の能動的な反復のかわりに、自らの身体を使つて知覚的に連続的な類同化を行つていくように思われて来る(270頁)」あるいは「自己の身体を動かす時のみ、彼らにとつての常同反復行動が、われわれにとつての現前化による反復と同じようなものとなるのである(288頁)」としていることから、通常の自己においてはノエマ的自己がノエシスの自己を触発するのだ

が、かれらにあつては身体的感覚がその役割を果たしているということになる。これが自閉的傾向の強い重症児自身にとつての常同行動の意味だということである。彼らは通常の自閉症の症例と比較すると身心の機能がより大きく障害をうけているようだが、常同行動に関しては基本的に同様だと考えられる。常同行動を持つ自閉症児あるいは重症児においては、根源的時間の発生の原初のところ、自己が自己にやらんとするその時に、自己化の働きが不全となり、その現れとして常同行動が生じてくるのだといえよう。

ところで、一定の行動なり動作が「反復」されるのはなぜかについての中田の解釈には若干疑問を感じる点がある。彼は「反復しようとすることは、たとえ完全な合致に至らずとも、過去のものと類似なもの来るべき現在において持とうとすることだ(270頁)」として、常同行動が積極的な企投であることを認めているようではあるが、他方では「彼らは、常同反復行動により、彼らの世界を操作しその変化を楽しんでいるのでは決してない。むしろ彼らは、世界の変化から逃れるために、この活動を行つていると考えられる(288頁)」と述べているように、基本的には常同行動を自我の機能にとつて消極的なものと捉えているようである。常同行動がこのような消極的な動機によるものだとすると、果たしてあれだけ「長く」「繰り返す」ことが可能だろうか。しかも中田が、彼らにとつての常同反復行動が、われわれにとつての現前化による反復と同じようなものだとしていることからすると、われわれ自身の現前化、すなわち自己の自己化が消極的な動機によるものということになるのではないか。

プランケンブルクの患者アンネ・ラウは、母親に次々と質問をして困らせた。その質問はたとえば「これこれの服地はどんな服にいいか、どんなときにどんな服を着ればいいのか、それはどうしてか」といった質問であつた。アンネの疑問は普段われわれが自明のものとして疑問に思ひさえしないものについての疑問であつた。自己の自

己性が危機に類していた分裂病患者のアンネは、このような質問をして母に答えてもらうことで、自己あるいは世界の自然な自明性を成立させようとする積極的で主体的な努力をしていたと考えられる。自閉症の常同行動もこれに比せられるような積極的なものといえるのではないだろうか。すなわち自閉症の常同行動は、自己を成立させ、そして時間を成立させようとする積極的な意味を持った行動なのではないだろうか。しかし、その企てはあくまでも現実の身体活動によってのみ遂行されようとするために、表象され自己に現前するような抽象的な自己とはならないために常に未遂に終わるということではないだろうか。その行動自体は、サックスが「行動のなかにだけあらわれ、行動することによってのみ得られる統合(181頁)」という場合の統合を自ずと目指すものだと考えられる。

以上、木村と中田の自己論・時間論を導きの糸として、自閉症児の常同行動の意味するところについて分析をすすめてきた。自閉症の現象の理解は、われわれ自らの心的現象による以外にはないのであり、自閉症の現象に接した場合のわれわれ自身の意識・知覚の成立の過程を深くさかのぼることによってのみ解明されるものと思われる。それはまた、自閉症の現象の理解がそのまま人間の理解につながるということであり、理解の困難な対象であればあるほど人間の根源に迫っていかざるをえないことを意味する。

## 引用文献

- (1) Kanner, L. 十亀史郎他(訳) 一九九五 幼児自閉症の研究 黎明書房
- (2) 川瀬泰治 一九九五 関係発達論としての自閉症研究 別府大学紀要
- (3) 村瀬学 一九八三 理解のおくれの本質 大和書房
- (4) 小澤勲 一九八四 自閉症とは何か 精神医療委員会
- (5) 石井哲夫・白石雅一 一九九三 自閉症とこだわり行動 東京書籍
- (6) 浜田寿美男 一九九二 「私」というものなりたち ミネルヴァ書房

- (7) 中田基昭 一九八四 重症心身障害児の教育方法 東京大学出版会
- (8) Heidegger, M. 細谷貞雄(訳) 一九九四 存在と時間(上、下)、ちくま学芸文庫
- (9) 木村敏 一九九〇 分裂病と他者 弘文堂
- (10) 木村敏 一九八一 自己・あいだ・時間 弘文堂
- (11) 木村敏 一九八二 時間と自己 中公新書
- (12) Sartre, J. P. 松浪信三郎(訳) 一九七七 存在と無 人文書院
- (13) Blankenburg, W. 木村敏・岡本進・島弘嗣(訳) 一九七八 自明性の喪失、みすず書房
- (14) Sacks, O. 金沢泰子(訳) 一九九四 左足をとりもどすまで 晶文社